



を示すものであり、地場産業的な産地が形成されていることを意味するものではない。裂織の生産量はきわめて少なく、現在ではほとんど産業の形を取っておらず、流通ルートも確保されていない場合が多い。その存立形態も「産業」とは一線を画したものとなっている。地場産業の存立基盤を検討するにあたっては、原材料の確保や技術・技能の伝承、市場の確保などが重要な課題となっている。しかし、裂織の製作にあたっては、現在ではその地域独特の原料などが使用されることはほとんどなく、その面からの地域性はほとんどなくなってしまっている。また、土産品などの形で販売が行われているケースはあるものの、一般的な製品の形で市場に流通ケースはほとんどない。このため、裂織の存立基盤を検討するにあたっては、地場産業等とは異なる視点から検討することが必要である。

そこで、本研究においては、裂織の存立基盤を以下の4項目からとらえ、比較していきたい。

#### ① その地域で裂織はどのように使われていたか

裂織は歴史的存在であり、その地域にどのような裂織が存在していたのか、どのように使用されていたのか、などは裂織の特徴に大きな影響を与える。作家を中心としたアートを追求する地域においても、その地域の歴史的背景が意識されることが多い。特に、地域振興を追求する立場においては、この視点は重要である。

#### ② 裂織を保存するための組織と拠点

現在、裂織は産業としては成立していない。そのため、それを存続させていくためには、そのための組織を作ることが必要である。また、それにあたっては活動の拠点も必要になる。裂織を継続的に生産していくためにはこれらを維持していくことが不可欠であり、多くの産地では行政による支援が大きな役割を果たしている。その特徴と課題を把握することは、その産地を考える上で不可欠である。

#### ③ 技能伝承

裂織を製作するにあたっては、それほど高い技能は必要とされない。しかし、多くの地域では既に地域内での技能伝承が途切れてしまっており、特別な組織による教育がなければ技能伝承ができないような状況となっている。そのため、技能伝承は生産の維持にきわめて重要な役割を果たしている。また、そうであるが故に技能伝承の形や内容などには、それを行う組織の特徴が強く表れる。その意味においても、技能伝承の検討は、裂織の地域的存立基盤を考える上で重要である。

#### ④ 組織・製作者の志向と今後の方向性

裂織の製作は市場での販売と切り離されて行われることが多いため、製作者の志向が作品に強く反映される。例えば、伝統性志向とアート志向では、裂織という製作手法が同じであるというだけで、製品はまったく異なったものとなる。そのような志向は組織の性格や技能伝承の形態にも大きな影響を与えるため、これをとらえておくことが産地研究の前提となる。

以下、事例として取り上げる4産地について、上記の視点から検討を加える。なお、本小論の内容は筆者が各地域で実施したヒヤリング調査に基づくものである<sup>1)</sup>。

### 3. 相川産地

相川産地は新潟県佐渡市西部に位置する。相川町は佐渡金山の所在地として有名であり、かつては多くの鉱山労働者が来住していた。その廃鉱跡は現在は観光地として多くの観光客を集めている。佐渡の焼物として有名な無名異焼の中心的な生産地もこの地域であり、元々は金山で働く労働者の日用製品として生産されていたものだった。現在は作風が洗練され、多数の作家が生産にあっている。相川町は佐渡を代表する観光業と漁業の町となっている。

#### ① 裂織はどのようにして使われてきたか

かつて、この地域の主要産業は漁業と金山での採鉱だった。裂織はその労働着として用いられていた。裂織は地が厚く保温性に優れているため、低温の海上で働く漁民にとっては、必需品と言える労働着だった。また、鉱山労働者にとっては裂織の丈夫さが身体を守るための保護着として評価され、多く用いられた。このため、相川地域では裂織の衣類に対する大きな需要が存在していたのである。

一般には、裂織は農民や漁民によって自家用に製作・使用されていた。相川地域においても漁民が用いていた裂織の多くは自家製のものであった。しかし、鉱山労働者は裂織を自分では作ることができず、購入して使用しなければならなかった。そのため相川においては市で裂織の販売が行われていた。これは、他の地域ではあまりみられない販売形態である。販売された裂織は、主に佐渡外から移入した古着を原料とし、季節風が強く漁のできない冬季に漁家の女性によって製作されていた。なお、これにあつ

ては生産性を高めるために裂きと織りなどの分業化も行われていた。これも他地域にはあまりみられないことである。相川地域においては大量の需要を背景として、裂織が産業として成立しうる状況にあったと考えられる。ただし、相川地域の裂織の流通は製作した漁家の女性がそれを市で販売するにとどまり、流通を拡大する役割を果たす問屋などが現れることはなかった。裂織は製作に多くの時間と手間をかけなければならないために生産には限界があったことから、産業化の段階にまでは達していなかったものと考えられる。佐渡金山は1950、51年頃に規模が大幅縮小されて従業員が減少、裂織の需要も減少した。さらに昭和30年代にナイロン製作業衣などが出回るようになると、軽くて丈夫な衣類が求められるようになり、裂織は生産されなくなった。

## ② 保存のための組織と拠点

上述のように、相川産地においては昭和30年代に裂織は生産されなくなった。しかし、地域内に多くの織機などが残っていたため、民俗学研究者などが中心になり調査が進められた。この成果が評価され、1976年、相川町に残っていた織機などが国により重要民俗文化財に指定された。これにともない、民俗文化財の保存などが必要になり、旧相川町は展示施設の建設を計画した。佐渡には多くの観光客が訪れていたものの、当時の相川町には観光施設がなく、地域振興上の大きな課題になっていた。そのため、建設した施設に観光施設的な側面を持たせ、観光客誘致につなげることを目指したのである。それで、施設は佐渡金山の産業遺産群に隣接する場所に計画され、建設が進められた。これにあたっては、地域に地場産業として存在していた陶磁器業(無名異焼)も組み合わせられ、裂織と焼物の双方を学習・体験できる施設(相川町技能伝承展示館)として建設された(1988年)。

体験施設が組み込まれたのは、主に修学旅行などを視野に入れ、そのメニューとして実施することができるかと判断されたためである。新潟県の学校は佐渡を修学旅行に組み入れていることが多く、多数の修学旅行生が毎年訪れる。近年は単なる見学だけではなく様々な体験メニューを求められることが多いため、このような施設の建設は修学旅行客の誘致に有効である。2010年度には裂織体験が約600名、陶芸体験が約500名あり、施設の重要な収入源となっている。また、裂織体験等を行う場合、3時間程度

の時間がかかるため、宿泊とセットで行われるケースが多い。ヒヤリングによれば、体験者の約8割が地元旅館に宿泊しているとのことである。技能伝承展示館は地域振興上、きわめて大きな役割を果たしていると評価できる。

織機等の設備(織機は約50台を設置)は、当初は地域内で使用したものを集めて使っていたが、次第に消耗・破損したため、地元出身の大工(現在は東京在住)に依頼して、以前使われていたものと同じ構造の織機を作り、使用している(写真1)。また、材料は経糸として使用する綿糸のみ購入している。かつては科や麻なども使われていたが、現在はすべて綿糸に置き換わっている。裂くための古着などは地域住民が寄付することが多く<sup>2)</sup>、購入はしていない。この施設は地域に貢献するとともに、地域によって支えられてもいるということができよう。

なお、この施設はソフト面も含めてすべて行政(相川町・佐渡市)が運営している。これは採算性の問題に加え、地域の裂織製作者への便宜を図るためである。これらの点については、次項において述べる。

## ③ 技能伝承

技能伝承展示館の建設にあたり、補助金を受けるための条件として、後継者育成が義務づけられた。前述した体験施設の設置は、この条件を満足させるためのものでもある。前述のように、体験施設では主に修学旅行生の体験学習などが行われているが、そのためには1回あたり10名程度の指導員が必要であり、開設当初、その指導員が不足した。そのため、



写真1 佐渡市技能伝承展示館で使用されている復元されたねまり機

まず、指導員を育成するための技能伝習が行われることになった。

これは技能伝承展示館の建設に先立って行われたため、各公民館に織機を設置し、裂織講座を開くという形を取って実施された。ここでは裂織を作った経験のあるお年寄りが指導者となって、地域の伝統的な製法と製品を伝授した。ただし、これにあたっては分業体制を取らず、一人で布を裂いてから製品化までをできるように変更した。前述のように、多くの地域では分業化が行われておらず、一人の製作者が布裂きから製品化までのすべての工程を担当している。相川産地において分業化が進んでいたのは生産量が多く、産業化の前段階にまで進んでいたためである。現在においてはそれほどの生産量が見込めないため、分業化を前提として特定の工程のみの技能伝承を行うのでは、結果として技能伝承を行うことにならない可能性が高かったためである。また、これを通して裂織の製作方法の標準化も進められた。裂織は基本的に各家において作られていたため、細かい部分については製作方法が統一されていなかった。しかし、修学旅行生などを指導するにあたってはこれでは不都合が生じるため、指導者の育成事業を通して裂織の製作方法が統一されることになったのである。

このように部分的な変化はあったものの、相川産地においては基本的に伝統的な技法と、それに基づいて製作される製品が伝承されることになった。例えば、緯糸用に裂いた布も、アートの製品を作ることを志向する産地では染色して色を出すことが多いが、相川産地では原則として染めないまま使用している。材料を節約するため、織り上がった裂織を加工する際にも極力はさみを入れることを避ける。また、織機も現在ではほとんど使われなくなった「ねまり機」を使用しており、伝統を継承するという意識が非常に強く示されている。この事業によって多くの指導者が育成され、技能伝承展示館の体験活動は、開館後2、3年で軌道に乗せることができた。現在は指導員は通常は4名体制、修学旅行などが入ったときは約10名の体制で対応している。

技能伝承展示館では、指導者育成事業が終了した後も「初級講座」「中級講座」（いずれも受講期間は1ヶ月）が設置され、裂織の技法を体験的に学べるようにされた。これは、裂織の技術を学びたいという希望者がとても多かったためである。この事業は現在では廃止されているが、これまでの受講者は百

数十名におよぶ。技能習得後も裂織製作を続けることを希望する者は、前述した技能伝承展示館の機を作製している業者から機を購入し、製作にあっている。これは、相川産地の伝統的な裂織を織るためにはそれに適した機が必要であるためである。ただし、「ねまり機」は使いにくいという意識が強く、現在では技能伝承展示館以外では高機形態の機を使うことが普通になっている。

当初、技能伝承展示館では作製した裂織を加工し、土産品として販売も行っていった。しかし、技術を習得した講座修了生が土産物生産などに携わるようになると、土産品の製作などはそちらに任せ、技能伝承展示館では体験事業等を通じた技能伝承を中心に行うように転換した。ただし、独立しても自分では機を持たず、製品を製作することができない修了生も少なくない。技能伝承展示館では、そのような修了生の便宜を図るため、年会費を支払うと冬期を中心に機を貸し、それを使って自由に製作できるという制度を作った。これは修学旅行が夏期に集中するために冬期の施設利用を増やす必要があったことと、裂織を地域に根付かせるために継続して製作する者を増やしたいなどの意図があったためである。このようにして技能を習得していった者の中には、独立して土産物生産などに携わる者も多い。裂織が再び地域の産業としての地位を取り戻しつつある。

このような動きによって、地域住民の裂織への認識も上昇してきた。技能伝承展示館が開館した頃は島内でも裂織を知らない住民が多かったが、近年では裂織がギフトなどにも用いられるようになってきている。裂織が地域アイデンティティ形成に大きな役割を果たすようになってきている。

#### ④ 志向と今後の方向性

以上述べてきたように、相川産地では伝統性を守ろうとする志向が非常に強い。これは技能伝承展示館だけではなく、そこから独立して製品を作る者も同様であり、相川産地の裂織の重要な特徴を形成している。この背景としては、相川産地の織機が国の重要民俗文化財に指定されたことが復興の契機であり、伝統を維持していかなければいけないという意識が非常に強かったこと。それに地域で裂織が作られなくなってから復興の動きが出るまでの時間が短く、前に裂織の製作に携わっていた者が直接技術伝承を行ったことが指摘できる。

また、伝統的な製品であるが故に土産品等として

の需要と結びつきやすかったと言うことも指摘できよう。観光客が土産品として求めるのは、その地域の風土を反映した製品である。相川産地が製作する裂織は、この点においても需要にマッチしたものであった。つまり、多数の観光客が訪れる観光地であるという地域的特性も、裂織の伝統性を生かした土産品等を産業的に製作するという生産構造に合致し、それが相川産地の特性の形成に結びついていったのである。

このように、伝統性の重視と土産品生産の志向が、相川産地の新しい存立基盤を形成する背景となったと言える。このことについては産地内においてもほぼ共通の理解となっており、アートを追求する作家を志向する者も、ほぼ同様の形で制作を行っている。相川産地においては、この方向を基本的に維持することを前提として今後も進んでいくものと考えられる。

#### 4. 十和田産地

十和田市は青森県東部、三本木原に位置する。西部には十和田湖などの観光地があるが、東部は水田が広がる農村地帯であり、現在も農業が盛んである。気候が冷涼でしばしば冷害に襲われたことから馬産が発達し、馬の町としても知られている。現在では馬産は衰退したが、様々な馬文化が残り、観光振興にも役立てられている。青森県内にはこぎん刺、ボロなど特徴的な衣文化が存在しているが、十和田市では裂織の伝承に力を入れており、新たな観光資源としても注目されている。

##### ① 裂織はどのようにして使われてきたか

十和田地域では、裂織の他、こぎん刺、ボロなども多く使われていた。もっとも良い衣類はこぎん刺にして強度を増して使用し、破損した衣類には様々な継ぎが当てられて使用された。しかし、この地域で多く用いられていたのは「ボロ」と呼ばれる端布などを縫い付けて作った衣類である<sup>3)</sup>。この衣料も破損するたびに新たな端布によって補修され、繰り返し用いられた。裂織は、それでも使えなくなったようなものを裂いて作られていた。これらの仕事は冬期間の女性の仕事で、各家庭では娘が嫁に行く前に教えておくべきものとされていた。このように、十和田地域の裂織は衣料消費の中の最終的な段階に位置し、日常生活の中で貴重な衣類を徹底的に使用

することを目的として作られてきたのである。

十和田地域では裂織は特にコタツ掛けに多く用いられており、戦前くらいまでは各家庭で使用されていた。その他にも、農作業用の衣類などにも使用された。裂織の経糸は主に麻が用いられた。戦前は各農家が麻を植え、それを績んで藍で染めて用いた。戦後、麻の栽培の規制が厳しくなると綿糸を購入して使用するようになった。しかし、経済が発展して衣料が豊富になってくると、いつしか裂織は生産されなくなってしまった。

##### ② 保存のための組織と拠点

十和田地域で裂織の保存に最初に着目したのはK氏(1936-2003)である。K氏は十和田市の出身だが高校卒業後に郷里を離れ、裂織のことについてはほとんど何も知らなかった。しかし、叔母の逝去にともなって帰省した際、その形見の中に裂織の帯があるのを見つけ、そのすばらしさに感動した。K氏はこれをきっかけとして裂織に関心を持ち、学び始めた<sup>4)</sup>。当初は農家を回って残されている裂織を分析して構造を研究したり、作った経験のある方から十和田地域の伝統的な裂織を作るための技能を学習したが、それに飽きたらず、作家のU氏に師事し、新しい手法を取り入れた裂織の作成に着手した。K氏は創作的な側面をより強調したかったものと推測される。このため、K氏が習得した裂織の技法は、伝統的な南部地域のものとは必ずしも一致していない<sup>5)</sup>。K氏のオリジナルの技法と言える。K氏はこれを普及するために1980年、南部裂織保存会を結成した。

保存会結成当初は活動拠点がなかったため、K氏が自宅などにおいて裂織教室を開催、裂織の普及活動を行った。当初の参加者は少数だったが、次第に各地の公民館が社会教育講座の一環として裂織教室を開催するようになった。公民館での裂織教室は十和田市内から奥入瀬町まで広がり、受講者も増加した。このような活動によって裂織の評価が高まり、1986年から1999年頃までは三沢市内の温泉旅館が施設を提供、そこを活動拠点として教室が開催された。この他、1992年から2002年までは廃校となった旧長下小学校の校舎も活動拠点となっていた<sup>6)</sup>。

このように南部裂織保存会はK氏を中心として活動を展開してきたが、1998年に開催された「活彩あおもり大祭典」に参加し、地域や行政から大きな評価を受けた。このような中で十和田市が地域の伝統

文化をまもる活動をしている組織を集めて施設を作ることになり、2002年、道の駅とわだ内に「匠の館」が建設された。十和田市は当初、これを市内の様々な伝統文化の拠点施設とすることを計画していたが、建物の利用に関する条件などから南部裂織保存会と農産物加工グループのみが参加した。以後、南部裂織保存会はこの施設を拠点として活動している。

### ③ 技能伝承

「匠の館」には70台の織機が設置され、技能伝承が行われている（写真2）<sup>7)</sup>。短時間の体験教室もあるが、これとは別に裂織の技能を体系的に伝承する「本科」「研究科」「師範科」の各1年のコースが設置され、教育が行われている<sup>8)</sup>。「本科」では、基礎となる織物を時間をかけてできるようにすることが目指されており、整経から始めて半幅織、広幅織などができるようにすることが目標とされる。「研究科」はその基礎の上に立ってより複雑な織物の製織、「師範科」は昔の織物や紬などの技法を学ぶ。「本科」を修了すれば一応の織物を織ることができるとされている<sup>9)</sup>。受講者は主婦と高齢者が中心で、何かを作ることの喜びを感じたい、と希望してくることが多い。なお、体験活動は主に地元の小学生～高校生を対象として行われており、利用者は年間500～600人程度である。観光客による体験活動は、あまり多くはない。

技能教育の指導にあたる指導者は、会員の中から技能に優れた者が選ばれている。かつてはK氏がず

っと指導にあたっていた。これは保存会が基本的にK氏の弟子によって組織されていたためである。指導者には特に資格が必要ではないが、K氏が2002年に青森県の伝統工芸士に認定されていたため、2007年にやはり県の伝統工芸士に認定されたS氏が、現在は指導にあたっている。この他、助手として指導にあたる者が4名いる。他地域・他団体との交流はあまり多くない。

### ④ 志向と今後の方向性

十和田産地の裂織は、K氏によって復興された当初は伝統的な手法で作られていた。しかし、その後は布の色を生かすのではなく染めた布を使用してカラフルな色が使われるようになり、創造的に織ることに力が入られるようになってきている（写真3）。アート志向が強まりつつあると言える。

その一方で、産業化を視野に入れた商品開発も行われている。青森県が2008・09年度に実施した「売れる商品づくり」「買ってもらえる商品づくり」の商品企画の一つとして南部裂織が採択され、東京からデザイナーが訪れて製品開発のアドバイスをを行った。これを基にショルダーバッグの開発が行われている。このようにして開発された商品は2010年2月に大阪でテスト販売され、好評を得た。ただし、まだ大規模に生産・販売する体制は整っていない。

このように、南部裂織は伝統の原点を追求したいとの希望もあるものの、アート志向が強く、商品化も進みつつある。この背景としては、K氏が南部裂織を復興した段階で、伝統だけでは飽きたらず、新

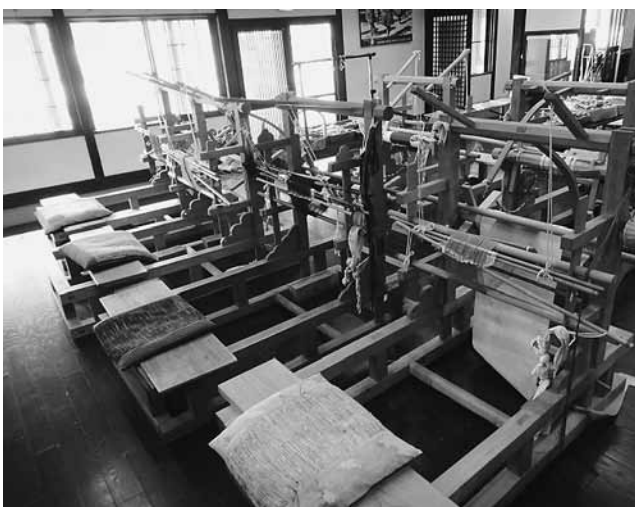


写真2 十和田市「匠の館」で使用されている織機



写真3 十和田産地で作成されている裂織の例



しい手法を求めて導入していったことを指摘できる。産地リーダーの志向が大きな影響を与えていると考える。

## 5. 原産地

原村は、長野県の中東部、八ヶ岳の西南麓に位置する高原の村である。八ヶ岳東麓の野辺山原と同様に高原野菜の産地として発展し、キャベツの生産量が多い。近年は八ヶ岳山麓の高原として多くの観光客を集め、別荘村なども建設されて観光の村として発展している。

### ① 裂織はどのようにして使われてきたか

原村では、かつて「ボロ織り」と呼ばれる裂織が地機で織られ、農作業着などに用いられていた。しかし、戦後になると屑繭を使用した紬織物などが生産されるようになり、裂織はあまり生産されなくなった。さらに1960年代頃から野菜栽培が盛んになるとその収入によって衣服を十分に購入することができるようになり、地機そのものも使用されなくなった。農業による収入を拡大する方が裂織の製作に時間をかけるよりも合理的であると考えられるようになったためである。裂織や地機は各家庭で技能の伝承がされてきたが、現在ではそれも途絶えている。

### ② 保存のための組織と拠点

このように、原村では戦後裂織の生産が減少し、特に1960年代以降は生産が途絶えていたような状態であった。原村の裂織を復活させたのは原村立八ヶ岳美術館と裂織作家のN氏である。2002年にM氏が美術館の館長に着任したが、当時、入館者数の減少が続いており、新しい企画を立てることが求められていた。これにあたり、美術館という静の施設の中に動の要素を取り入れたいと考え、裂織の企画展を開催、その中でN氏による裂織教室を開いた。N氏の作品は大変グレードの高いもので好評を得、その後、八ヶ岳美術館において継続的に裂織展が開催されるようになった。

N氏は1990年代末に原村で裂織に出会い、それ以来原村の裂織に注目していた。N氏の出会った裂織は年配の女性が嫁に来るときに持ってきた2組の藍染めの布団をほぐして作ったもので、まずこたつの上掛けとして用いられ、それが傷むと下掛けにし、それもだめになると下に敷いて用いられた。この他、

半天やちゃんちゃんことしても用いられ、背負子の下に着る袖無しの服などとしても用いられた。裏地だけを裂織にして綿入れにするような形でも用いられていた。布を裂く幅は1cm程度だった。

N氏はこのような原村の裂織について情報発信をしたいと考え、様々な事業を展開していった。企画展が開催された翌年の2003年からは原村の郷土館において織物の体験教室を開催している。これは、次の世代に「昔はこういうことを生活の糧としていたんだ」ということを理解してほしかったためである。原村においても裂織を経験しているのは高齢者だけで、その下の世代には裂織は伝えられていない。そのため、イベントを行う際は、子ども教室を必ず行っている。また、同年に信州さきおりの会を結成、裂織の普及と制作者の拡大に努めている。

美術館も裂織や染織を対象とした企画展を継続的に開催している。2005年には全国裂織展の移動展を開催、2006年以降は隔年で「あなたが選ぶ 信州の裂織展」を開催している。美術館が裂織の普及に果たしている役割は大きい。これを通して美術館の入館者数も増加、2001年には7000人だった年間入館者数は、2004年以降は1万人を超える水準で推移している。

一方、信州さきおりの会は2005年より毎年裂織フェアを開催している。裂織フェアは、作品としての完成度が低く、「信州の裂織展」には出品できないような地元の高齢者の発表の場としての役割も果たしている。また、作品等の展示即売なども行われており、2008年のフェアには23ブースの出店があった。地域住民の間では経済的な効果に対する期待も大きい。これらの活動を通して、「原村に来れば裂織が見られる」ということがPRできるようになった。これを受けて行政も、主催する「田舎暮らし体験ツアー」の中に裂織の体験を取り入れるようになっており、裂織は地域の観光資源としての役割も果たすようになっている。

### ③ 技能伝承

前述のように、原村では裂織や地機の技能は家族の間で伝えられてきた。しかしその伝統は絶えて久しく、また、地域住民の間では復活させたいという要望も必ずしも強いものではない。しかし、美術館やN氏、信州さきおりの会などの活動が活発化するにともない、原村では裂織を作る高齢者が増加してきている。

原村ではかつて裂織を作っていた高齢者が多く、裂織の技能が残存していた。現在、このような製作者を中心に手織り保存会が結成されている。技能を持っていない高齢者などには、N氏が指導を行っている。このため、原村においては伝統的な技能が色濃く残存していると言える。

ただし、そこで製作されているものは必ずしも伝統的な裂織ばかりではない。近年は裂織に工芸的な側面を求めるような動きが強まってきている。最初は布の色を活用する程度だったが、その後、柄や絵を出すようになった。現在は美大出身者が指導してアートの制作を志向するようになってきている。このように作風が変化してきたのは、裂織を販売するようになったためである。前述のように裂織フェアで販売が行われるようになると「売れるもの」を作りたいという要望が強まり、それがアートの作品を追求する動きとなって現れたのである。ただし、伝統的なものの製作もこれと並行して行われており、自家用は伝統的なもの、売るものは現代的なもの、というように区別して取り扱われるようになってきている。

#### ④ 志向と今後の方向性

以上で述べたように、原村においては元々技能を持っていた高齢者による裂織の製作が大きな位置を占め、過去と現在との間に断絶が存在しない。そのため、N氏の指導等もあるものの、基本的に伝統的な技法がそのまま受け継がれてきている。これが裂織が存続するための強固な地域的存立基盤を形成している。ただし、販売の拡大にともなって作風は次第にアートのものへと変化してきている。現在はまだ伝統的な作品が作られているが、世代交代などにもなって、次第にアートの作品が中心になっていくものと推測される。しかし、アートの作品には地域の風土が反映しにくく、信州のオリジナリティは見えにくい。作家性が強まるに従って活動の単位は地域から個人へと移り変わるため、現在の原村の裂織が持っている地域的な存立基盤を失うことにつながりかねない。この点には十分な注意が必要であろう。

村と美術館の果たす役割も大きい。これまでの活動で原村の裂織の知名度は向上し、裂織の地域文化資源としての地位は確立したとすることができよう。これまでは美術館などの活動はアートとしての裂織に重点が置かれていたが、今後は地域性を重視

した方向も追求し、裂織の地域的存立基盤を維持していくことが期待される。

## 6. 蒲原産地

蒲原産地は静岡市東部に位置し、駿河湾に面している。かつては東海道の宿場町として栄え、現在では東海工業地域の一翼を担う工業地域となっている。また、水産業も盛んで、鯖などを加工した節の産地としても知られている。近年は、旧東海道沿いに残る古い建築物などを活用して、歴史文化を活用したまちづくりが進められており、裂織もその中の一つに取り入れられている。

### ① 裂織はどのようにして使われてきたか

蒲原町は元々養蚕業が盛んな地域であり、座繰り製糸などによって絹糸が生産されていた。一方、農家や漁家では手機を利用しての織物も生産されていた。ただし、この地域で生産されていたのは綿織物であった。価格の高い絹糸は他地域に販売され、綿糸を購入して生産にあたったのである。織物は基本的に自給のために生産されたものであり、この地域で盛んであるミカン栽培や製塩業の仕事の合間を縫って製作された。問屋等を通して流通ルートに乗せることはなかった。そのため、生産規模は小さなものであったが、このような織物を作る習慣と織機が地域内に存在したことが裂織<sup>10)</sup>の製作につながったと考えられる。

蒲原地域では昭和30年代半ば頃まで帯や敷物を主な用途とした裂織が製作されていた。着るものに裂織の生地を使用するようになったのは、近年のことである。この地域の特徴として指摘しなければならないことは、裂織が作業着として生産されてきたのではなかったことである。これには、他地域に比べて産業が発達し、経済的に豊かであったことがその背景にあると考えられる。また、気候も温暖であるため、相川産地や十和田産地のように防寒性を重視した地の厚い織物を作る必要もなかった。そのため、この地域の裂織は他の地域のものに比べて薄く、やわらかいものになっている<sup>11)</sup>。また、相対的に品質も良いものが作られていた。しかし、蒲原地域においても高度経済成長期に入って衣類が豊富になると、裂織は生産されなくなっていった。



## ② 保存のための組織と拠点

蒲原産地において裂織に注目し、それを復興させたのは織物作家のA氏である。A氏は織物工芸に関心が深く、特にスウェーデンのつづれ織りを専門として研究していた。A氏は研究の一環として1980年にスウェーデンを訪れた際に裂織に出会い、そのすばらしさに目を開かされた。A氏はこれまで地元の蒲原にも裂織が存在していることは認識していたが、あまり注目をしていなかった。それで1981年に帰国後、駿河裂織倶楽部を設立して蒲原の裂織についての研究を開始した。しかし、その頃には既に裂織が製作されなくなっからかなりの時間が経過しており、経験者から技能の伝承を受けることはできなかった。また、織機も数台しか残っておらず、残存する裂織をほぐして構造を分析するところから始めなければならなかった。分析から、細い毛糸を入れて織ることが蒲原産地の裂織の特徴であることがわかり、復元に取り組んだが、当初は蒲原産地の特徴である柔らかさを出すことができなかった。これができるようになるまでにはかなりの時間を要した。

A氏は織物工芸のカルチャースクールも開いており、その生徒が中心になって裂織の制作に取り組んでいる。生徒にはアート志向が強い者もあり、自由に制作することが基本となっている。

これは、A氏の作風とも関連している。A氏は織物に関する体系的な教育を受けた経験がなく、独自の織り方で作品を作っている。このため、制作方法や技法に関しては、伝統性はまったくと言っていいほど受け継がれてはいない。また、作品を制作するにあたっては、作品を完成させることを優先している。例えば、伝統的な裂織は裂いて作った緯糸を染めないで用いているが、A氏は必ず染めてから用いる。これは作品を考えるにあたって色が重要な役割を果たすためである。作品を布に合わせるのではなく、作品に布を合わせているのである。A氏のこのような作風が、現在の産地の特性を形作っていると言えよう。

制作はカルチャースクールを中心として行っているが、蒲原町内に「お休み処」も運営している。旧蒲原町（現静岡市）は、旧東海道を整備して旧蒲原宿を観光拠点とすることを計画し、周辺地域の景観整備を実施した。駿河裂織倶楽部はその中で観光情報の提供や土産品の販売などを行う「お休み処」の指定管理者となっている。ここでは観光情報提供の

一環として、蒲原地域の伝統文化を広めることが期待されている。裂織は伝統文化の一つに位置づけられており、駿河裂織倶楽部がその指定管理者となっていることは、その活動が地域から評価されているためと考えられる。

## ③ 技能伝承

技能伝承は、前述の通り、A氏が主催するカルチャースクールにおいて行われている。教室の生徒は20人程度であり増減はないが、入れ替わりが激しい。カルチャースクールに通う市民は様々なことに関心を持ち、織物などが一定程度できるようになると別の教室に移って、新しいことを勉強するという傾向が強い。そのため、蒲原産地においては常に一定の制作者はいるものの、本格的にそれに打ち込んでいるのはA氏だけという状況である。カルチャースクールにおける技術伝承には限界があると言わざるを得ない。

## ④ 志向と今後の方向性

前述のように、A氏はアート作品を制作することを中心に活動してきたが、今後は伝統性を重視していきたいと考えている。現在の段階では、A氏の活動は次第に注目を浴びようになってきてはいるものの、地域内での認知度は必ずしも高くない。また、行政との関係も必ずしも密接とは言い難い状態である。A氏は、この理由として裂織が地域の地場産業になっていないためである、と考えている。裂織が地域の地場産業となれば、市民の認知度も上がり、行政からの支援も受けやすくなる。そのためには、伝統性の重視が必要となってくるととらえているのである。

筆者は、このようなA氏の認識は正しいと考える。かつて蒲原地域で製作されていた裂織は生活に結びついていた製品であり、アートではなかった。また、当時の技法とA氏の技法も大きく異なっている。蒲原地域の伝統的な裂織とA氏の裂織との間には、大きな相違点が存在しているのである。そのため、現在の蒲原産地においては、裂織の存立基盤が地域と十分に結びついておらず、それが認知度の低さや後継者の育ちにくさなどの存立基盤の弱さとなって現れていると考えられる。

## 7. おわりに

裂織は資源の少ない時代に作られた伝統的な織物であるが、近年は創造的なアートへと変化しつつある。ただし、それには地域差が大きい。本小論では4つの裂織産地の事例調査から、その地域的存立基盤について検討を加えた。

表は、4産地の特徴をまとめたものである。まず、裂織がどのように使用されてきたのかを見ると、蒲原産地以外では衣類として用いられることが多く、地が厚く保温性に優れる裂織の特性が特に寒冷地において活かされていることがわかる。しかし、その生産はほとんどの地域で高度経済成長期までに途絶えている。今回取り上げた4産地の裂織生産も、いずれも復興されたものである。

復興の主体となったのは、相川産地が行政、十和田産地が作家によって組織された保存会（ただし施設に関しては行政による援助）、原産地が村立美術館と作家、蒲原産地が作家である。産地による差が大きい。蒲原産地以外は行政や公的機関による支援が重要な役割を果たしている。これは、行政にとっても裂織が新たな地域観光資源・文化資源として有用であるためである。支援方法は相川産地が施設＋ソフト、十和田産地が施設、原産地がソフトと多様であるが、その産地の特性と合わせ、必要な支援が行われている。

ただし、復興された技能は必ずしもかつてその地域で行われていたものと同じではない。以前の技能がよく伝承されているのは相川産地と原産地であり、これらはいずれもかつての生産者が技能伝承の主体となっ

ている。これに対し十和田産地と蒲原産地ではかつての生産者から技能伝承を受けられなかったり、受けられても他の技法をアレンジしたため、かつての技法がそのままの形で伝承されていない。そのため蒲原産地では創作的な作品が中心となり、十和田産地も伝統性を強調しつつも、その作風は以前の裂織とは異なってきた。また、原産地においても裂織の販売が拡大するにつれてアート志向が強まりつつある。これに対し、相川産地では伝統性が重視され、かつての形をそのまま伝えようとしている。このような差は、裂織の復興に果たした作家の影響に寄るところが大きい。

裂織の復興にあたり、相川産地以外では作家が重要な役割を果たしている。裂織は資源が不足する中で作られていたものであるため、現在の社会には必ずしも合うものではない。一方、裂織は構造上アートの作品を作ることが難しくない。このため、現在では裂織は一般的にはほとんど用いられない一方で、多くの裂織作家が裂織アートを制作している。産地の復興に多くの裂織作家が関わっているのはこのためである。しかし、作家は制作するにあたって作品としての完成度を高めることを目的とすることが多く、地域の伝統性からは遊離しがちになる。技法の変化はこの結果である。このため、今後の方向性についてもアートを重視する傾向が強くなっている。

しかし、伝統的な裂織が地域社会の中にその存立基盤を形成していたのに対し、新しいアートとしての裂織はそれを受け継ぐことができない。アートの重視は裂織の地域的存立基盤を弱体化させるというリスクをとまなうことが考えられる。また、アートを重視した裂織は風土性と切り離されていることが多いため、地域的アイデンティティとも結びつきにくいという課題もある。アートとしての裂織の地域的存立基盤は、まだ確立していない場合も少なくない。しかし、アートとしての裂織は地域の文化創造にもつながるものであり、新たな地域観光資源としても有用である。裂織を地域振興に結びつけるためには、その地域的存立基盤を確立していくことが必要である。

本小論の一部は日本地理学会2010年度秋季学術大会において報告した。

本小論は平成22年度福島大学地域創造支援センターセンター員としての課題研究（研究テーマ：裂織に見る地域文化の伝承と創造）の研究成果である。

表 4産地の特徴

	どのように使われてきたか	技能伝承の特徴	中心となる組織	志向
相川産地	販売用＋自家用衣類中心	伝統重視	行政	伝統性重視
十和田産地	自家用衣類・こたつがけ	伝統性＋創作性	作家を中心とする保存会＋市の補助	伝統性＋アート
原産地	自家用衣類・こたつがけ	伝統性＋創作性	美術館＋作家	伝統性＋アート
蒲原産地	自家用敷物・帯	創作性重視	作家中心	アート重視

資料：聞き取り調査により作成

## 注

- 1) 本研究を進めるにあたり、2008年9月に八ヶ岳美術館で館長のM氏と裂織作家のN氏に、2010年8月に道の駅とわだ内の「匠の館」において南部裂織保存会で指導員S氏の助手を務めるF氏に、2010年8月に蒲原町「お休み処」において駿河裂織倶楽部の代表A氏に、2010年9月に佐渡市技能伝承展示館において佐渡市職員で展示館担当の学芸員YA氏と指導員のYO氏に貴重なお話を伺いました。感謝申し上げます。
- 2) 地域の旅館からは古くなった浴衣やシャツが、縫製業者からは端布が寄付される他、多くの地域住民から不要となった古着が寄付されている。
- 3) 青森県のボロについては、小出由紀子・都築響一(2009)に詳しい。
- 4) ヒヤリング調査によれば、1972年頃のことと推測される。
- 5) 例えば、現在南部地域で製作されている裂織では古地を裂いて作った緯糸を染めて使用しているが、これはかつての南部地域の裂織ではなかったものである。ヒヤリングの際も見学しているお年寄りからは「昔のものとは違う」との声がよくあると指摘された。
- 6) 十和田市では地域文化の振興を図るため、廃校となった小学校の校舎を利用してアート作家の活動拠点を作る活動を行っていた。
- 7) 織機は十和田市が施設建設時に作製した体験学習用の8台以外は、K氏が農家などから収集したものを使用している。
- 8) 本科以上のコースに参加できるのは保存会の会員に限定されている。会員は2010年現在、約230名である。
- 9) 南部裂織保存会では、裂織を土産品などに加工して物販も行っているが、そこへの出品を行う製作者には、本科のコースを修了していることを義務づけている。
- 10) 蒲原産地では裂織は「ボロ織り」「ボッコリ」などと呼ばれていたが、本小論では記述を統一するため、「裂織」と表現する。
- 11) 裂織の手法で製作される織物の「かたさ」「やわらかさ」は、一般には古着を裂く際の幅で規定される。太く裂くほど堅く、逆に細く裂くほど柔らかくなる。しかし、蒲原産地の裂織は幅に比べて柔らかくなることが多い。これは古着が長期間潮風にさらされることを通して柔らかくなるためと言われている。

## 文 献

- 今村賢司(2001):愛媛県佐田岬半島の裂織 民具研究 123 pp.1-11
- 大塚康平ほか(2003):資源循環型文化・裂き織りに使用される古布の流通機構 デザイン学研究 50-2 pp.53-62
- 小出由紀子・都築響一(2009):『BORO つぎ、はぎ、いかす。青森のぼろ布文化』アスペクト
- 佐藤利夫(2005):『裂織 木綿生活誌』法政大学出版会
- 深堀習(2007):21世紀の裂織 繊維製品消費科学 48-4 pp.25-37